

電子聴診器、心音見える化

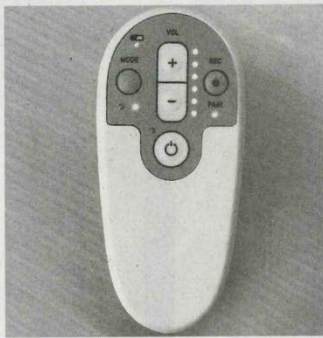
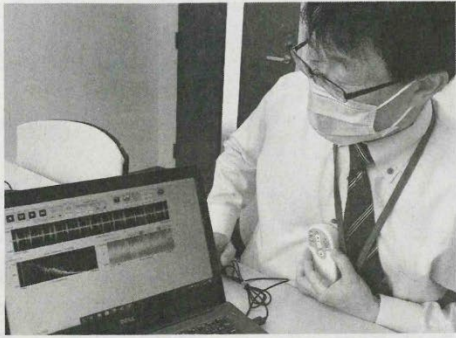
ミトリカ、来月発売

理化学分析用のガラス部品を製造するミトリカ（水戸市）は、医師らが患者の心臓の音を診断し「見える化」できる電子聴診器を開発した。音声だけでなく、波形の画像としてパソコン上に表示でき、データの送受信も可能だ。遠隔医療にも役立つ点をアピールし、11月後半から販売する。

開発した電子聴診器はパソコンのマウス程度の大きさで、重量は約100g。患者の胸に直接あてなくても、衣服の上からでも接触せず診断できる。幅広い周波数をキャッチする圧電フィルムを使ったセンサーと、電気的な増幅によって心臓や肺の音を聞き取る。

聴診した音は無線システムでパソコンやタブレットに送られ、医師らは画面で確認できる（写真上）。パソコンのマウス並みの大きさで、録音や音量調整も可能だ。

波形画像 パソコンに保存 遠隔医療利用も視野



聴診した心音などの波形データをパソコン画面で確認できる（写真上）。パソコンのマウス並みの大きさで、録音や音量調整も可能だ。

患者の状態を把握できる。データを送受信できるため「離島などでの遠隔医療にも利用できる」（平沼博社長）。

一般に病院や診療所で医師が使う聴診器は聴覚に頼っており、患者にはわかりにくく、医師が細かく説明しないケースが多い。データを蓄積したり、送受信したりすることも難しかった。

新型コロナウイルスの感染拡大で医療機関の経営危機が叫ばれ、効率的な診療の必要性も高まっている。電子聴診器を利用すれば医師と患者が日常的に対面しなくても通常は看護師や介護士が対応し、異常があった際

にデータを医師に送って診断を仰ぐこともできる。最適な聴診音で診断できるよう、3つの周波数から選択できるようにした。販売価格は1台当たり12万円前後。年間約5千台の販売を見込む。ミトリカは1965年の創立。理化学分析に使う精密ガラス部品の開発・製造から出発し、特殊ランプに事業領域を広げて海外展開も進めてきた。バイオセンサー集積回路や装置を設計・販売するBiocmos（東京都武蔵村山市）に出資しており、同社を代理店として電子聴診器を販売する計画だ。（水戸支局長 竹藪幸広）

2020年10月29日付 日本経済新聞